

機関番号：34310

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2007～2010

課題番号：19530526

研究課題名(和文) ヘンリ・ナウエンの福祉思想—「弱さ」とスピリチュアリティをめぐる逆説—

研究課題名(英文) Henri Nouwen's Welfare Thought: Weakness as Spirituality

研究代表者

木原 活信 (KIHARA KATSUNOBU)

同志社大学・社会学部・教授

研究者番号：20275382

研究成果の概要(和文)：本研究では、ハーバード大学教授から知的障害者施設のアシスタントに転じた思想家、神学者、福祉実践家であるヘンリ・ナウエンの「創造的弱さ」(「スピリチュアルな生」という概念をとりあげ、その思想と実践を研究した。彼は、パワーと強さに象徴される現代社会の逆説として「創造的弱さ」を提起したが、そこに新しい福祉の発想転換の可能性がある。援助する側の「弱さ」をネガティブなものとして隠蔽するのではなく、むしろ積極的に開示・活用していこうとする哲学(創造的弱さ)こそが彼の社会福祉思想の原点であると結論づけた。

研究成果の概要(英文)：In this study, I analyzed one of the welfare thoughts of Henri Nouwen. He was a professor at Harvard University who switched careers to work as a care worker at the L'Arche Daybreak in Canada. From the study, I concluded that the fundamental essence of his welfare thoughts and philosophy was "creative weakness"—a spiritual way of living, which uses the helpers' or supporters' "weakness" positively and not negatively. His thoughts revealed a new spiritual perspective of social work practice as a paradox of the modern "strong" and "power" oriented society.

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	900,000	270,000	1,170,000
2008年度	900,000	270,000	1,170,000
2009年度	1,000,000	300,000	1,300,000
2010年度	700,000	210,000	910,000
年度			
総計	3,500,000	1,050,000	4,550,000

研究分野：福祉思想・福祉哲学

科研費の分科・細目：社会学・社会福祉学

キーワード：ヘンリ・ナウエン、スピリチュアリティ、弱さ、ソーシャルワーク、福祉哲学

1. 研究開始当初の背景

(1) 「強さ」が求められる現代社会のエートスの影響はソーシャルワーク、社会福祉実践にも及んでいるのではないか。

(2) ヘンリ・ナウエンの思想は、キリスト教神学のみ限定されるものでなく、ソーシャルワーク実践にも重要な問題提起をしているのではないか。

(3) ヘンリ・ナウエンの福祉思想、哲学のエッセンスは一体何なのか。

2. 研究の目的

本研究は、ヘンリ・ナウエンの福祉思想の核心は何かを明らかにするものである。特に彼の「弱さ」とスピリチュアリティの関係を明示することである。現代社会の「強さ」に

対抗する「弱さ」に着目したノウエンの思想的先駆性を明示することである。彼の神学思想は、欧米では注目され検討されているが、福祉思想は、未だ体系的研究がなされているとはいいがたい。したがって、その全体像を明らかにすることは社会福祉学の研究からも意義がある。

3. 研究の方法

本研究は、文献研究を基本とする。国内外のスピリチュアリティに関する資料を収集分析し、またWHOの健康定義の動向と絡めながら検証した。ヘンリ・ノウエンの思想に焦点をあてるために、そのパーソナルな日誌や書簡、および原資料の収集・解析をすすめた。研究手法としては、自分史を活用したナラティブ・ライフヒストリー方法を用いて、ノウエンの内的世界に迫った。

4. 研究成果

研究成果として、資料解析などの結果から、ノウエンの人物像、その思想のエッセンスとしての「創造的弱さ」、「スピリチュアルな生」について以下の点を明らかにした。

(1) ノウエンのプロフィール

ノウエン(Henri Nouwen, 1932-1996)は 1932年にオランダで生誕。1957年カトリックの司祭となった後も、カウンセリングの研究に専心。1968年にカトリック神学大学教員、1971年イエール大学神学部准教授となる。カトリック司祭がイエール大学教授になるということは余り例がなく、実践神学の理論的指導者として評価されたが、ノウエン自身は、貧しい人々へ仕える福祉実践に召命観を感じ、イエールを1981年辞職して、南米へ渡る。しかし、厳しい現実と直面し、特に「社会正義を求める熾烈な葛藤は、しばしば私を落胆させ、疲労させた」(ノウエン著、長沢・植松訳、2001=1998:13)ことにより、南米でのミッションを断念した。

その後、1983年にハーバード大学教授に迎えられ、アカデミック界での名声は頂点を極めた。しかしながら1985年に突如、「より徹底的にイエスに従うように招かれている場所はどこではないと感じ」(ノウエン著、長沢・植松訳、2001=1998:14)、大学を辞した。

そして、フランスへ渡りジョン・バニエ(Jean Vanier)が創立した知的障害者の共同体ラルシュに移り住み、そこで新しい出発をする。バニエも元大学教授であったが、生涯半ばで知的障害者との共同体を創設した人物である。彼は、トロントにある同じラルシュ共同体、デイブレイクの霊的牧者として、障害者と生活を共にした。ここでのスピリチュアリティの実践思想が、世俗

化した欧米のキリスト教界に異彩を放ち、現代の「預言者」との評価を受け、カトリック、プロテスタント界を問わず、反響を生み、彼の著作は多くの言語に翻訳され、今でも注目されている。

ノウエン略年譜

Michael Ford(1999). *The Wounded Prophet: A Portrait of Henri J. M. Nouwen* (New York: Image Books Doubleday)参照 (一部改編)

1932	1月24日	オランダのNijkerk生誕
1957		ユトレヒト(Utrecht)大司教区のカトリック司祭に任命
1957-64		Nijmegenカトリック大学で心理学を専攻
1964-66		メニングガー研究所の宗教と精神分析部門の研究員
1966-68		ノートルダム大学(Indiana)の心理学部の客員研究員
1968-70		アムステルダム <small>の</small> 牧会研究所のスタッフ、 Utrechtのカトリック神学校専任教員
1970-71		Nijmegenカトリック大学において神学研究
1971		イエール大学神学部 牧会神学講座 助教授に就任
1974		終身雇用資格を得る
1975		ジェネシー(Genesee)修道院で半年を過ごす
1976		ミネソタにあるエキュメニカル研究所の客員研究員
1977		イエール大学神学部 牧会神学講座 教授に昇進
1978		ローマにあるノースアメリカン大学にてサバティカル
1979		ジェネシー(Genesee)修道院で半年を過ごす
1981		イエール大学辞職
1981-82		ジェネシー(Genesee)修道院のプラザーとなる。 ボリビア、ペルーに半年滞在する。
1983		ハーヴァード大学神学部教授に就任
1985		同上辞職
1985-86		フランスのラルシュ共同体に9ヶ月滞在
1986-96		カナダ、ラルシュ、デイブレイクの牧会者となる
1996	9月21日	オランダのヒルヴァサムで死去 享年64歳

(2) 「弱さ」「傷」という言説

ノウエンの福祉思想のキー概念となっている「弱さ」「傷」という点に焦点をあてることで、彼の思想の背景が濃厚になる。

① 希死念慮

ノウエンの著作、伝記記者の証言、日誌においても、彼はメンタルヘルス上の問題を抱えていた。魅力的で、多くの聴衆が彼のメッセージに感動したようであるが、独りでホテルの部屋に帰ると、「愛された霊的指導者は悲しい道化師のように一人で沈ん

でいた」(Ford, 1999: x iv) 悩める人物であり、傷つきやすく、精神的にも不安定であった(Ford, 1999: x iv)。また彼の日記には、次のような記述がある。「けさ目覚めたとき、私は気分的に少々滅入っていた。理由はわからない。人生は空虚で無価値、疲れるだけに思えた。陰気な気分が襲われたような感じだった。その気分は私に嘘をつく。人生は無意味だ。」(日記 1986年2月13日) (ナウエン著、長沢・植松訳、2001=1998:206)

そして、晩年の日記には、友人との破綻から生じた強烈な希死念慮(自殺願望)を伺わせる深刻なうつ病体験を赤裸々に綴っている。自殺予防の観点からもこの点は重要な視座と生きた資料を残しているので自殺のケアの観点から更に詰める予定である。

② セクシャリティ

フォードの指摘によると、彼は同性愛者であった(Ford, 1999: vi)。それに伴う罪意識が先述したメンタルヘルス上の問題にもつながっていると分析している。カトリック聖職者であるという立場において、教義の問題の狭間にあつて揺れた。イエール大学時代には、彼は同性愛の権利を擁護する立場をとるが、後にこれを撤回して教会の教義を代弁して、同性愛に反対するなど、不安定であった。つまりこの一貫性のなさは、優柔不断からではなく、自己の性的アイデンティティと律法の狭間にある葛藤からくるものである。彼自身の著作のなかに直接、内面的な同性愛の葛藤を見出すことは容易ではないが、以下のような記述はヒントとなる。「私たちは、性的衝動にまつわることによって、もっともつらい体験をすることが多いのは明らかです。私自身もそうですが、私の友人たちの葛藤は、自分についてどう考え、どう感じるかに、性がいかに中心的な役割を果たしているかがはっきりと見て取れます。」(ナウエン、小淵訳 1998=1992:98)

聖職者の立場と、同性愛者の意識の両面性において板ばさみとなり、苦悩し続けた。そこに彼の自覚としての「弱さ」が示される。

(3) 「創造的弱さ」

ナウエンが示した「弱さ」は、援助する側のものであったことに特徴がある。現代社会には強さやパワーを求める雰囲気があり、ソーシャルワーク理論のなかでもパワー(力、強さ)は重要なテーマである。

ナウエンが示した生き方—彼はこれをスピリチュアリティと呼んでいるが—創造的「弱さ」そのものであり、援助する側の「弱さ」の告白にはじまる、弱さを担う人間同士の水平な関係性である。ナウエンは以下の

ように論じている。

「長い訓練を経て、人間の行動を理解する高度なレベルに達した人は大勢いるが、人のために自分のいのちをも捨て、自分の弱さを創造の源泉にする人は少ない。多くの個人にとって、専門的訓練は力を意味する。しかし、上着を脱いで友の足を洗う奉仕者は、力なき者であり、その訓練と養成は、自分の弱さを恐れずに直視し、それを他者のために役立つことができることを意味する。この創造的弱さ(creative weakness)こそ、奉仕者にはずみを与えるのである。」(ナウエン、佐々木訳、2002=1971:166-167)

さらに彼は、「どの牧師も、助けを求めている人に、自分自身の経験を隠しておくことはできない。また、彼はそれを隠そうとしてはならない。」(ナウエン、西・岸本訳、1981=1972:124)と傷や弱さそのものが人を癒すことがあることを力説している。そして、「自分の存在を顕にしないで、他者への指導性を発揮することはできない。つまり自分の置かれている環境の匿名性と冷淡さ(アパシー)とから一歩踏み出し、交わりの可能性を具現化しない限り、それは不可能である。」(ナウエン、西・岸本訳、1981=1972:94) 結局、彼は、弱さや傷が彼の言葉でいうところの創造的弱さという生き方(スピリチュアリティ)になるとき、しかもそれが個人の自我のレベルを超えて、コミュニオンのなかで発露されるとき、そこに創造性が生まれ、癒しのコミュニティ(共同体)が形成されると主張する。

(4) 砕かれる(broken)力と強さ

こうして従来、否定的なものか隠蔽されてきた弱さと傷は、新しい視座を与えられることになる。ナウエンは以下のようにこの「創造的弱さ」から生まれる希望を解釈する。

「共同体が癒しの共同体であるのは、そこで傷が癒され痛みが緩和されるからではなく、傷や痛みが、新しいヴィジョンの生ずる場や機会となるからにほかならない。こうして告白し合うことは希望を深め合うこととなり、弱さを分かち合うことは、来るべき力のすべてを思い起こさせることになる。」(ナウエン、西・岸本訳、1981=1972:132)

これは、社会福祉やソーシャルワークに応用すれば、専門職の力の誇示や権威の問題に対抗するもう一つの軸を示している。それは、ナウエンによれば”taken, blessed, broken, given”(最後の聖餐の言説の4つの動詞)がカギとなる。とりわけ「砕かれる」(broken)という言葉は、弱さを象徴する表現である。そして、砕かれた自己が自分のためではなく、共同体に与えられる(given)ときこそ、新しい力に変えられるという逆説的

な可能性を示している。

(5) スピリチュアルな生としての「弱さ」

本研究において、ナウエンの福祉思想の根幹は、彼自身が実践する「創造的弱さ」そのものであると結論づけた。すなわち、それは、強さが砕かれるという「スピリチュアルな生」そのものである。同時に、それはカリスマ的秘儀でもなく、あるいは宗教教義でもなく、訓練によって、誰もがなしうる「生」のナラティブである。

そしてそれは、現代社会の強さに対抗するもう一つの軸となりうる可能性を有しており、とりわけ専門職が占有する社会福祉実践には批判的な対抗軸となる重要な視点を提供するものである。

「弱さの情報公開」など、「弱さ」そのものを中心的な実践テーマにしているべてるの家での精神障害者の実践には、上述したナウエンの思想と共通の論点がみられることがわかってきた。つまり、そこでは専門職主義への懐疑など、ナウエンの思想と共鳴する。その共通課題などを理論的に検討することは今後の課題となった。

(6) 今後の課題—「弱さ」の福祉哲学構想

以上のナウエン思想の考察結果から、社会福祉学への応用課題として、ストレングスマデル（「強さ活用モデル」）とは対照的に、「弱さ活用モデル」（強さが砕かれた結果としての「弱さ」）に基づく福祉哲学の構想が現実味を帯びてきた。これは、強さを探究するのではなく、砕かれた弱さそのものを肯定的に受け止め、それを内在化させるときに得られる逆説としての弱さ—ナウエンはこれを創造的弱さと定義した—であるが、この逆説的ロジックこそが、援助哲学の新しい方向性と可能性を帯びていると結論づけた。

今後は、この論点を起点に、スピリチュアリティとの関連から、この弱さの福祉哲学について、ソーシャルワークのナラティブ論の中で展開することを研究課題とする。

Nouwen, Henri J. M. 著作リスト（死後編纂されたものも含む）

- (1971). *Creative ministry*. Doubleday.
(1976). *Aging: The Fulfillment of Life*. Doubleday. With Walter J. Gaffney
(1979a). *The Wounded Healer: Ministry in Contemporary Society*. Doubleday.
(1979b). *Clowning in Rome: Reflections on Solitude, Celibacy, Prayer, and Contemplation*. Doubleday.
(1981). *The Genesee Diary: Report from a Trappist Monastery*. Doubleday.
(1983). *A Cry For Mercy: Prayers from the Genesee*. Doubleday.

(1983). *Compassion: A Reflection on the Christian Life*. Doubleday. With Donald P. McNeill and Douglas A. Morrison.

(1986). *Reaching Out: The Three Movements of the Spiritual Life*. Doubleday.

(1989). *Lifesigns: Intimacy, Fecundity, and Ecstasy in Christian Perspective*. Doubleday.

(1990a). *Walk with Jesus: Stations of the Cross*. Orbis Books.

(1990b). *The Road To Daybreak: A Spiritual Journey*. Doubleday.

(1992a). *Life of the beloved: spiritual living in a secular world*. Crossroad.

(1992b). *The Return of the Prodigal Son: A Meditation on Fathers, Brothers, and Sons*. Doubleday.

(1993). *Gracias!: a Latin American journal*. Orbis Books.

(1994a). *Here and Now, Living in the Spirit*. Darton, Longman and Todd.

(1994b). *With burning hearts: a meditation on the Eucharistic life*. Orbis Books.

(1995). *The return of the prodigal son: a story of homecoming*. Continuum.

(1996). *Bread for the journey: reflections for every day of the year*. Darton, Longman and Todd.

(1997). *Adam: God's beloved*. Orbis Books.

(1999). *The Inner Voice of Love: A Journey Through Anguish to Freedom*. Image Books.

(2003). "Resisting the Forces of Death" & "No' to the Vietnam War" in *Liberating Faith: Religious Voices for Justice, Peace, and Ecological Wisdom*. Ed. Roger S. Gottlieb. Lanham, Maryland: Rowman & Littlefield, 467-475.

(2004). *Out of Solitude: Three Meditations on the Christian Life*. Ave Maria Press.

(2005). *In Memoriam*. Ave Maria Press.

(2006a). *The Dance of Life: Weaving Sorrows and Blessings into One Joyful Step*. Ave Maria Press.

(2006b). *With Open Hands*. Ave Maria Press.

(2006c). *Can You Drink the Cup?* Ave Maria Press.

(2007a). *Heart Speaks to Heart: Three Gospel Meditations on Jesus*, Ave Maria Press.

(2007b). *Behold the Beauty of the Lord: Praying With Icons*. Ave Maria Press.

（日本におけるナウエンの先行研究リスト）

- (1978) 河野信子「問いを生きる:宗教を教える人の霊性」西南学院大学児童教育学論集 4(1), pp.121-134.
- (2003) 木原活信「ヘンリ・ナウエンの福祉思想—スピリチュアリティと「創造的弱さ」をめぐって」キリスト教社会福祉学研究 (36), pp. 17-28.
- (2004) 米田綾子「ソーシャルワーク実践における共感的(compassionate)パートナーのまなざし—Henri Nouwen の『傷ついた癒し人』に学ぶ」『東京純心女子大学紀要』 (8), pp.79-94.
- (2005) 木原活信「福祉原理の根源としての「コンパッション」の思想と哲学」『社会福祉学』 46(2), pp. 3-16.
- (2005) 丹澤桂 書評「ヘンリ・J.M.ナウエン監修(野村祐之編訳)『砂漠の知恵 砂漠の師父母の言行録』」『基督教論集』 pp.152-157.
- (2005) 大塚野百合『ヘンリ・ナウエンのスピリチュアル・メッセージ: レンブラントの名画「放蕩息子の帰郷」をめぐって』キリスト教新聞社
- (2008) 酒井陽介『ヘンリー・ナウエン: 傷つきながらも愛しぬいた生涯』ドン・ボスコ社
- (2009) 廣戸直江訳『傷ついた預言者—ヘンリ・ナウエンの肖像』 聖公会出版(= Ford, 1999 *Wounded Prophet: A Portrait Of Henri J. M. Nouwen*, Darton, Longman and Todd, Ltd., and Doubleday)
- (2010) 大塚野百合『あなたは愛されています—ヘンリ・ナウエン』教文館

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計3件)

- ① 2010/04/01 引土絵未、市瀬晶子、山村りつ、田邊蘭、大倉高志、金子絵里乃、木原活信「自殺予防における援助実践に関する実態調査からの考察—ソーシャルワークの視点としての“つながり”に着目して—」日本自殺予防学会学会誌『自殺予防と危機介入』第30巻1号, pp.76-83. 査読有
- ② 2009/07/31 木原活信「ソーシャルワークにおける先行研究検討の意義と文献検索の方法」『ソーシャルワーク研究』vol. 35. No. 2, pp. 42-49. 査読無
- ③ 2009/03/31 木原活信「社会福祉領域におけるナラティブ論」『上智大学総合人間科学部成果報告書』 pp.43-56. 査読無

[学会発表] (計9件)

- ① 2011/03/29 木原活信「キリスト教と社会福祉の接点を求めて—理論と実践—」日本基督教学会近畿支部会 シンポジウ

ム 同志社大学神学部礼拝堂 (京都)

- ② 2010/12/4 木原活信「「顔」をめぐる福祉臨床—社会福祉学におけるナラティブ・モデルの立場から—「心映えの生化粧/死化粧—アート・セラピーの可能性を探る」佐賀大学冬フェスタ in アバンセ シンポジウム, アバンセ・ホール (佐賀)
- ③ 2010/11/11 Akiko Ichinose, Katsunobu Kihara, ” Integration of Christian Spiritual Care into Assisting the Relocation of Older Adults with Dementia”, NACSW Sheraton Imperial Hotel & Convention Center Durham, North Carolina.
- ④ 2010/10/16 Katsunobu KIHARA “Case Study of Spirituality Applied Japanese Christian”, Christian Social Welfare Expo. 2010 international symposium, Seoul in Korea. 汝矣島教会
- ⑤ 2010/09/10-11 大倉高志、市瀬晶子、田邊蘭、木原活信、中山健夫 「自殺者遺族が望む「情報提供の在り方」の探究—続柄を考慮した語りの比較分析—」日本自殺予防学会 第34回 大妻女子大学 ポスター発表
- ⑥ 2010/03/05 Akiko ICHINOSE, Emi HIKITSUCHI, Ritsu YAMAMURA, Ran TANABE, Takashi OKURA, Erino KANEKO, Katsunobu KIHARA “Role as Mediator in Suicide Prevention”, Project team of Suicide Prevention in GP at Doshisha University 韓国尚志大学
- ⑦ 2009/10/29 Katsunobu KIHARA “The challenges of integrating Christian faith and social work practice in Japan: A historical review of Christian spirituality”, NACSW Convention, Indianapolis, Hilton Indianapolis, Indiana, USA.
- ⑧ 2009/08/29 木原活信 第42回北星学園大学社会福祉夏季セミナー 基調講演「ソーシャルワークの存在理由—なぜソーシャルワーカーでなければならないのか: 思想史的断章」(札幌・北星学園大学)
- ⑨ 2009/4/17 市瀬晶子・引土絵未・大倉高志・田邊蘭・山村りつ・金子絵里乃・木原活信「自殺予防におけるソーシャルワークの視点と課題」, 日本自殺予防学会第33回大会, 大阪

[図書] (計7件)

- ① 2011/05/07 Katsunobu KIHARA “Social Work Education in Japan: Historical perspective”, (pp.209-223) Selwyn Stanley ed., *Social Work Education in Countries of the East: Issues and Challenges*. (New York: Nova Science

- Publishers, Inc.) (641)
- ② 2011/01 木原活信「ソーシャルワークにおける先行研究の意義と文献検索の方法」
ソーシャルワーク研究所監修 北川清一、
佐藤豊道編『ソーシャルワークの研究方法
—実践の科学化と理論化を目指して—』
pp. 59-73. 相川書房(260)
 - ③ 2010/06/20 木原活信「ソーシャルワーク
の形成過程」 pp. 33-59. 『相談援助の基盤
と専門職』ミネルヴァ書房(260)
 - ④ 2010/03/15 山村りつ、市瀬晶子、引土絵
未、田邊蘭、大倉高志、金子絵里乃、木原
活信「自殺予防におけるソーシャルワーク
の視点と可能性—生きることへのまなざ
し—」埋橋孝文・同志社大学社会福祉教育
支援センター編『新しい福祉サービスの展
開と人材育成』法律文化社, pp. 30-53.
 - ⑤ 2010/02/2 木原活信「マッピング・プラク
ティスの活用」 pp. 117-125, 「利用者の言
説・語りの構成事例」 pp. 226-233『新しい
ソーシャルワークの展開』ミネルヴァ書房
(255)
 - ⑥ 2009/4/09 木原活信「社会福祉領域におけ
るナラティブ論」野口裕二編『ナラティ
ヴ・アプローチ』勁草書房
pp. 153-169. (279)
 - ⑦ 2009/04/01 木原活信「ソーシャルワーク
の理論と動向」 pp. 192-207「相談援助サー
ビスの視座」 pp. 208-221 日本社会福祉士
会編『新・社会福祉援助の共通基盤』(上)
中央法規(302)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

木原 活信 (KIHARA KATSUNOBU)
同志社大学・社会学部・教授
研究者番号：20275382

(2) 研究分担者

なし

(3) 連携研究者

なし